胡氏

田中貢太郎

直隷(ちょくれい)に富豪があって家庭教師を傭おうとしていると、一人の秀才が来て、自分を傭うてくれと言った。主人は内へ入れて話してみると、言語がさわやかであったから、好い人があったと思って悦(よろこ)んだ。秀才は自分で胡(こ)という姓であると言った。

そこで富豪は幣(かね)を出して胡を自分の家へ置いた。胡は児(こども)を教育するにあたって心切(しんせつ)で勤勉であった。それに学問が博くてしたっぱな人間でないということが解った。その胡は時とすると散歩に出て夜暗くなって帰る癖があったが、その時は入口の扉を堅く閉めてあるにもかかわらず、叩いて人を呼ばないで、いつの間

にか室（へや）の中に入っていた。主人は不思議に思って、ある時そっと窺（のぞ）いてみると、室（へや）の中に胡はいなくて一疋の狐がいた。

主人はひどく驚いたが、しかし胡の意（こころ）をはかってみるに悪いことをするようでもないから、鄭重に取りあつかって妖怪というようなことで礼儀を廃すようなことはなかった。胡は主人に女（むすめ）のあるのを知って結婚したいと思ったのか、時どきその意味をほのめかしたが、主人はそのつど意味が解らないような顔をした。

ある日、胡は休暇をくれと言って出て往ったが、翌日一人の客が来た。客は黒い驢（ろば）に乗って来てそれを門

に繋いであった。主人はその客を迎えた。それは年の頃五十あまりの履物も着物も新しい、温厚な男であった。やがて二人が席につくと、客は自分の来た用事を話しだした。

「私が今日あがりましたのは、胡氏があなたと長く御交際を願いたいために、お宅の令嬢と結婚したいと申しますものですから」

主人は黙って聞いていたが、暫くして言った。

「僕と胡先生とは、もう莫逆（ばくぎゃく）の友になっております、結婚なんかしなくてもいいでしょう、それに児（こども）は、もう許婚（いいなずけ）になっておりますから、どうかあなたが僕に

代って、胡先生に話してください」
「しかし令嬢は、確かにまだ許婚になっていないことを知っておりますが、なぜ胡先生と結婚さすのをお嫌いになります」
　客はこんなことを二三回も繰りかえして言ったが、主人はきかなかった。客は慙(は)じたようなふうであった。客はまた言った。
「胡も家柄ですよ、そうあなたの家に劣るものじゃありませんよ」
　すると主人が言った。
「それではありのままに言いますが、私が結婚させせな

いのは他に意味はないが、ただ胡先生は人間ではありませんから」

客は怒った。

「それは無礼です」

主人も怒った。

「何が無礼だ」

「けしからんことをおっしゃる」

「何がけしからん」

「けしからんです」

二人は猛りたった。客はいきなり主人の顔をひっ掻いた。主人は家の者を呼んで、杖で撲(なぐ)ろうとした。客

は驚いて遁(に)げて往った。乗って逃げる隙もなかったとみえて驢はそのままにしてあった。側へ往ってみると黒毛の耳の高い尾の長い大きな驢であった。そこで手綱を解いて曳っぱったが動かなかった。そして何人(だれ)かが乗ろうとすると、そのまままつくばってしまった。それは蝗(いなご)のような虫であった。

主人は客が怒っていたので、きっと復讐にくるだろうと思って用心していた。翌日果して一隊の狐兵がおし寄せてきた。馬に乗った者もあれば徒歩でいる者もあって、それが戈(ほこ)を持ち弩(いしゆみ)を持っていた。馬の嘶(いなな)く声と人声が家の周囲に湧きたって聞えた。

主人は外へ出なかった。

「家に火をつけろ」

と言った。主人はますます懼(おそ)れた。その家に強い男がいた。家の者を従えて騒ぎながら打って出て、石を投げ箭(や)を飛ばして狐兵に当った。そして必死になって戦ったので双方に負傷者を出したが、そのうちに狐の方が負けてきて、ごたごたとなって逃げてしまった。その跡に狐の方で落して往った刀が雪のように光っていた。側へ往ってひろってみると、それは高粱(こうりゃん)の葉であった。皆が笑って言った。

「狐の腕前もこれ位のものだよ」

そして狐のまたくるのを恐れてますます備えをしていた。翌日家の者が聚って話していると、見あげるような大きな男が不意に空からおりてきて、手にしていた門の扉のような大きな刀を揮って斬りかかってきた。家の者はもう一人逐いつめられて斬られた。家の者は弓や射石を投げて巨人を中にとりこめて乱撃した。巨人は斃れてしまった。それは葬式の時に用いる藁人形であった。家の者はますます狐をあなどった。

　狐はそれから三日間はこなかった。家の者はすこし懈ってきた。主人はその時厠に往った。と、俄かに狐兵があらわれて、弓を張って主人を取り囲んで乱射

した。矢が臀（しり）にあつまってきた。主人は大いに懼れて叫んだので、家の者がかけつけて主人を救けて戦った。そこで狐は遁げて往った。矢を抜いてみると蒿（よもぎ）のとげであった。

こんなことで一ヶ月あまりを費した。狐の害はそれほどでもなかったが、いつどんなことをするかも判らないので警戒をおこたらなかった。主人はそれが厭でたまらなかった。

ある日胡が兵士を率いてきた。主人は出て往って胡の方を見た。胡はそれを見ると兵士の中にかくれた。主人は、

「胡先生、胡先生」

と言って呼んだ。胡はしかたなしに出てきた。主人は、

「僕は先生に礼を失していないのに、なぜ僕の家を攻撃します」

と言った。狐兵が弓を張って主人を射ようとした。胡はそれを止めた。主人は近くに往ってその手を握った。そして胡のいた斎（へや）へ伴（つ）れてきて、酒を飲みながら話した。その時主人は従容（しょうよう）として言った。

「先生は達人だから、了解してくださるだろうと思いますが、私は先生と家の児の結婚は好みません、それ

は先生の乗物も住居も、人とおんなじでないから、児が結婚したにしても先生の所にいられないことは先生も御存じだろうと思います、そのうえ諺にも瓜と果物の青いのは口に適しないということがあります、先生だってもらってくださるのは厭でしょう」

胡はひどく慙じた。主人が言った。

「先生が僕を見棄てないなら、僕の家に十五になる男の児があります、先生の方にどなたかありますなら、迎えたいと思いますが、先生の方に年比(としごろ)の方がないでしょうか」

胡は喜んで言った。

「僕に年のゆかない妹があります、公子より一つ年下です、ひどく馬鹿でもありませんから、さしあげたいと思いますが、如何でしょうか」

主人は起って拝礼した。胡も答礼した。そこで新たに杯を交換して歓び、前の仲違いは忘れてしまった。そして主人は酒肴をならべて胡の従者一同をねぎろうた。主人はそれから胡の住居を訊いて結納をおくろうとしたが胡が辞退した。そして胡は夜になって酔って帰って往った。

それから狐の害もなくなって富豪の家も安心した。そして一年あまりになったが、胡はこなかった。ある

人は胡が嘘を言ったのではないかと言ったが、主人は疑わないで待っていた。

また半年ばかりして胡が不意にきて、暑い寒いの挨拶をしてから、

「妹が大きくなりました、佳い日を定めて御夫婦に事(つか)えさしたいと思います」

と言った。主人は喜んだ。そこで期日を打ち合わして胡は帰って往った。

その日がきて夜になると果して輿馬(よば)の一行が新婦を送ってきた。嫁入り道具が非常に多くて、室の中に陳(なら)べてみると室の中に一ぱいになった。

新婦は舅姑（しゅうと）に逢った。その新婦の容色（きりょう）がきれはなれて美しかったので、主人は喜んだ。胡は一人の弟と妹を送ってきていたが、二人とも話すことが風雅で、それでまた二人ともよく飲んだ。そして、夜明けになって帰って往った。

新婦は豊年と凶年を知っていた。生活上のことは新婦の言葉に従ってやった。胡の兄弟及び母親は、時どき女に遇いにきたので村の人は皆それを見た。

底本：「中国の怪談（二）」河出文庫、河出書房新社
　　１９８７（昭和62）年８月４日初版発行
底本の親本：「支那怪談全集」桃源社
　　１９７０（昭和45）年発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年９月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。